第二章　漢字は世界で最も高度な文字

――真に文字と言へるものは漢字だけである――

■“言葉”と人類の進歩

この章の最初に、まづ掲げておくべきテーマがあります。それは、

「現代に於て、真に文字と言へるものは漢字だけである」

と言ふことです。

元々文字といふものは、発生するや否や消滅してしまふ言葉を保存するために発明されたもので、一語一語、言葉に対応して作られたものなのです。そして、さういふ文字は、今は漢字しか存在しないのです。

このやうな問題を、これからこの章で、もう少し詳しく見て行きませう。

一九三〇年以降、アメリカではチンパンジーに言葉を教へることを試みた学者が数え切れないほど輩出してゐます。彼らは人間の子供とチンパンジーを一緒にして、兄弟のやうに育てたのですが、チンパンジーはいづれも言葉が覚えられませんでした。といふ事は、「言葉は人間だけのものである」といふ事を証明したものと言へるでせう。

人類は、この“言葉”のお蔭で進歩が可能になり、万物の霊長の座に就くことが出来たのです。「三人寄れば文殊（もんじゅ）の智慧（ちえ）」と言はれるのも“言葉”があればこその事であり、その智慧を長い年代に亘（わた）って積み重ねて、今日の偉大な文化を築き上げることが出来たのです。これに対して、言葉を有たないチンパンジーには進歩が無く、今も百万年前の生活と全く変らない生活を続けてゐます。

然しながら、この“言葉”には致命的な欠陥がありました。それは「発生するや否や消滅してしまふ」といふ事と、「遠方に伝達することが出来ない」といふ事でした。ですから、重要な内容の言葉がふえて行くにつれ、これを記憶することが次第に困難にな

って行きました。その為、智慧の集積された偉大な言葉や重要な出来事を記憶して、これを次の世代に伝へる「語り部」といふ専門職が設けられた事もありましたが、それも無限に出来ることではありませんでした。

■文字の性質

人類は、このやうに言葉の力によって、万物の霊長となり得ましたが、先に書きましたやうに、言葉といふものは、発生するや否や消滅してしまひ、保存出来ないといふ欠点がありました。

この難題を完全に解決してくれたものが、“文字”でした。人類は遂に文字を発明したのです。その文字は、言葉を一語一語、視覚的符号として保存出来るやうに作られました。だから、これは“表語文字”と呼ばなければならないものです。従って、従来の“表意文字”といふ呼称は誤りであることをここに明言しようと思ひます。

文字といふものは、言葉を表すために作られたものですから、当然、“意味”も“発音”も共に兼ね備へてゐる、“表意兼表音文字”だったのです。これを“表意文字”と呼んだのでは、“非表音文字”だと誤解される恐れがあるのです。否、現にさう考へられてゐるのです。

繰返して言ひますが、文字は言葉を保存するために発明されたものです。ところが、欧米の学者たちは、斉(ひと)しく「最初、文字は言葉とは別に、物そのもの、事それ自体を直接表すものとして作られた」と説いてゐます。さうなればこれは表語文字ではなくて“表意文字”といふ事になります。

然し、考へて頂きたいと思ひます。文字が物事それ自体を直接表すものとして作ら

れたとしても、それを文字として人々の共通理解を得るためには、文字を「言葉を表した符号」として説明する以外に方法がないのです。

物事それ自体は言葉によって初めて表現されるものです。言葉を使はないで、どうして相手に“物事それ自体”を伝へることが出来ますか。だから、「物事それ自体を直接表すものとして作った」としても、それは「言葉を表すものとして作った」といふ事になるのです。「文字が言葉とは別に作られた」とは何としても考へることが出来ないのです。

それにも拘らず、欧米の学者たちは、頑（かたく）なに「文字は物事それ自体を直接表すものとして作られた」と主張してゐるのです。それは何故でせうか。彼らが用ひてゐる“表音文字”が「世界で最も進歩した文字である」と主張するためには、最初の文字をどうしても“非表音”の“表意文字”としなければ、説明出来ないからなのです。

そこで我が国でも多くの人に読まれてゐると思はれるイギリスのムーア・ハウスの『文字の歴史』(岩波新書)に依ってその意図を明らかにしたいと思ひます。

第一章・第四部の「文字と言語」の中で、文字は「言語とは別に発生したものである」と述べ、更に「言葉と文字の間には何の連鎖も存在しなかった」と念を押してゐます。それが文字を使ってゐる間に言葉との連鎖が生じて来たのであるとして、「この連鎖こそ、文字の目的そのものを変化させ、文字をして音を表現させ、文字を変革させたのである」と述べてゐます。

何といふ仰々しい表現でせう。「文字はもともと音を有たなかった。それが音を有つやうになったといふ事は文字にとって大変な飛躍なのである」といふこの主張は、「表意文字は原始的な文字であり、表音文字は進歩した文字である」と主張するためには無くてはならない前提条件だったのです。

そこでその考へ方がいかに誤ってゐるかを、別の面から明らかにしたいと思ひます。

■文字の歴史と造語の原理

人類最初の文字は、今からおよそ五三〇〇年前(紀元前三三〇〇年頃)に、今のイラクの土地に住んでゐたスメール人によって創作されました。それは勿論、言葉を一語一語表した表語文字でした。そしてその造語の原理は実に見事なものでした。続いて、エジプト人、インド人、中国人によって作られましたが、これらはいづれも許慎の説いた「象形(しょうけい)・指事(しじ)・会意(かいい)・形声(けいせい)」に「転注(てんちゅう)・仮借(かしゃ)」を加へた所謂(いわゆる)六書と同じ原理に依って作られました。

単純な物事は“指事”と“象形”とで表現出来ますが、それで表現出来ない物事は“会意”と“形声”といふ合成造字法によって作りました。それでも出来ない場合には“転注”といふ用法でこれを表現しましたが、それでも出来ない場合の最後の手段が“仮借”といふ用法でした。

“仮借”とは、その名が示す通り、どうしても或る言葉を文字に表現することが出来なかった場合、既に存在する文字の中でその言葉と同じ、もしくは似た発音の文字を“借”りて間に合はせる、といふ“仮”の用法です。

文字の使命は意味を伝達することに在ります。所が、その大事な意味を捨てて言はばその容器に過ぎない音声だけを借りる用法ですから、用字法としては最低であり、それで“仮借”と呼ぶわけです。

それでも、外国の言葉を表記しようといふ場合には、それを翻訳するか、もしくはこの“仮借”の用法に依り表記する以外に方法がありません。ですから、文字を有た

ない民族が、既存の文字を借りて自分たちの言葉を表記しようとする時には、必ずこの“仮借”の用法に依って表記することになるのです。

■日本で最初の表記法

紀元前の日本人は文字を有ってゐませんでした。一世紀に入ると、中国や韓国から漢字が入って来ましたので、これを“仮借”して国語を表記する事が起りました。

和我夜度爾（わがやどに）　左加里爾散家留（さかりにさける）　宇梅能波奈（うめのはな）　知流倍久奈里奴（ちるべくなりぬ）　美牟必登聞我母（みむひともがも）

といふ表記法がこれです。これは初期の万葉集に見える表記法ですが、この歌の表記に用ひられてゐる漢字は、総て“仮借”に依ってゐます。この使ひ方は万葉集に多く見られる所から、“万葉がな”と呼ばれてゐます。かなは“仮字”とも書かれますが、それは“仮借字”といふ意味でせう。

表語文字だと、どうしても千の単位の文字が必要になりますが、仮借だと、その言語の音韻の種類の数だけあれば足ります。ですから、理論的には我が国では四十七字の漢字を借りるだけで、どんな言葉でも表現できるわけです。それで、文字を創作するだけの能力の無い民族は、総てこのやうに既存の文字を仮借したものです。そしてこの“仮借”が、欧米の学者たちの言ふ“表音文字”なのです。

■世界最初の表音文字

世界最初の表音文字は、今から凡そ五千年前、アッカード人がスメール文字を仮借した時にその起原を発してゐます。

スメール文字の“𒀀”は、二本の角をもつ牛の頭部を象(かたど)った象形文字で、牛(スメール語でアレフと言ひました)といふ意味の表語文字です。これをアッカード人はアレフの頭韻の“ア”を表す文字として仮借しました。

“𒁀”は、家の象形文字で、家(スメール語でブェートと言ひました)といふ意味の表語文字です。これもその頭韻の“ブ”を表す文字として仮借しました。このやうにして、アッカード人はその言語を構成してゐる総ての音韻を表すのに必要なだけスメール文字を仮借し、これらを総称して“アレフ・ブェート”と呼びました。

今の“アルファベット”といふ言葉は、この“アレフ・ブェート”の変化したものです。また、“𒀀”は“A”に、“𒁀”は“B”に変化しました。

しかし、文字の使命は、アルファベットといへども唯(ただ)音声を伝達すれば済む、といふものではありません。その音声に盛られた意味を伝達することが、本当の目的なのであります。

ですから、表音文字で表記されたものは、いくつかの文字の音声をまとめて一つの言葉とする事が出来て初めて意味が表現でき、それから意味が汲取れるのです。所がそれがなかなか容易な事ではありません。また、出来たとしても隔靴掻痒(かっかそうよう)の感を拭ひ得ません。

■表音文字から表語文字へ

万葉人は“波奈”から“ハナ”の音声を取り出し、それで花といふ言葉を作り上げ、意味を汲取ったのですが、“ハナ”といふ音声の言葉には「端・花・鼻・洟」などの同音異語がありますので本当はその中のどれであるかを決定することは出来ません。

そこで、「端・花・鼻・洟」などの漢字が解るやうになりますと、“波奈”と書くよりも、“花”と書いた方が解り易くて好い、と考へるやうになりました。

橘之（たちばなの）　花散里乃（はなちるさとの）　霍公鳥（ほととぎす）　片恋為乍（かたこいしつつ）　鳴日四曽多寸（なくひしぞおおき）

右は万葉集後期の作品に見える表記法です。この歌では「乃・四・曽・寸」の四字だけが“仮借”で、他の漢字は逆に“音”が捨てられてゐて、“意”の方が借りられてゐます。

その結果、“橘”“花”などの漢字は、“たちばな”“はな”といふ日本語を表す文字となってゐます。つまり、「中国語を表す漢字を改造して、日本語を表す“表語文字”にしてしまった」のであります。

この用字法は“表語文字”として文字本来の性格を完備してゐますので、漢字を“借”りてはゐますが、“仮借”とは言ひません。

アッカード人は、初めはスメール文字を仮借して、それでアッカード語を表記してゐたのですが、習得には容易であっても機能の悪い“表音的表記法”に不満を感ずるやうになったと思はれます。なぜならばその数千年後に日本人が行った「外国の文字を改造して自国語を表す“表語文字”に改造すること」を行ってゐるからです。

かうしてアッカード人はスメール文字をアッカード語を表すための表語文字に改造して行きましたが、その字数は少なくても千字以上、数千字にも及ぶものでありましたので全く新しい文字を創作するのに劣らない大変な事業だったと言ふことが出来るでせう。

だからこそ、広い世界の長い人類の歴史の中でも、この例がアッカードと日本以外には全く見ることが出来ないのだと思ひます。その他の民族は、総て僅か数十字の文字を仮借するだけで一応の用が足りる“表音文字”で済ませて来たのだと思ひます。

「表音文字は表意文字より進歩した文字である」といふ欧米の学者たちの説が牽強附会（けんきょうふかい）の説である事は、アルファベット発生の歴史を観ただけで判ります。まして、アルファベットを発明したアッカード人が、これを捨てて、大変な難事業を敢行して、スメールの表語文字をそのままアッカードの表語文字として使へるやうにした事実を観れば、一層よく判ることと思ひます。

■アルファベットの歴史

今、世界で広く使はれてゐるローマ・アルファベットは、凡そ二千年前、大ローマ帝国がその国語であるラテン語を表すための文字として制定したものであります。その故に、ラテン文字ともまたはローマ字とも呼ばれてゐます。

然しながら、ラテン・アルファベットの大部分は、既存のギリシャ・アルファベットから借りたものであります。ギリシャ文字は二十四字でした。その中には、ラテン語には不必要な文字がありましたのでこれを捨て、足りないものもありましたので新たに作り、それで現在の二十六字になったものです。

そのギリシャ・アルファベットも、ギリシャ語を表すためにギリシャ人が自ら創作したものではありませんでした。既に存在してゐたフェニキヤ文字から借りたものであります。フェニキヤ・アルファベットは二十二字でした。その中にはギリシャ語には不必要な文字が三字ありましたのでこれを削りました。然し、必要な文字が五字無かったので新たに作って加へましたので、差引き二十四字になったものであります。

また、フェニキヤ文字も、フェニキヤ語を表すためにフェニキヤ人が創作したものではありません。アッカード人が創作したアルファベットから、フェニキヤ語を表すのに必要な文字を取捨選択して借り入れたものなのです。

さてここで注目すべき事があります。それは、フェニキヤ文字でもギリシャ文字でもラテン文字でも、よその文字を借り入れるに当っては、それぞれに必要な文字だけを借り、不必要な文字は捨て、足りない場合には新たに作って加へてゐる、といふ事であります。

これに対して、イギリスでもフランスでもドイツでも、ローマ帝国が制定したラテン・アルファベットをそのままそっくり借り入れてゐる、といふ点に注目したいと思ひます。英語やフランス語を表記するのに、ラテン文字には不必要な文字もあれば足りない文字もあるのに、削ることもせず、新しく作ることもせず、そのままそっくり借りたといふことであります。

ですから、英語でもフランス語でもドイツ語でも、初めからラテン・アルファベットではそれぞれの言語を正しく表現できなかったのであります。“表音文字”とは言ひながら、その表音が正確に出来ないのが、今のラテン・アルファベットなのであります。

重ねて言ひますか、ラテン・アルファベットは、今から二千年前、ローマ帝国がラテン語を表すものとして制定したものであります。その時点においてはそれは完璧な表

音文字だったと言って良いでせう。然し、現在においては“表音文字”として最低のものと言はざるを得ないのであります。

■漢字は高度な「表語文字」

今では世界のあらゆる民族が文字を使って書いてゐますが、その殆どが表音文字です。然し既に述べましたやうに仮名やローマ字などの表音文字は、非常に安直な表記方法なのです。それに対して「表語文字」は言葉を直接表した文字ですから、一瞬ぱっと見ただけで直に意味が解ります。所が、表音文字はそれが出来ません。

ですから表音文字は、非常に効率の悪い表記法なのです。然し世界の殆どがそれで辛抱してゐます。

私は学生時代に国語学を習ひました。それに依れば、「文字は象形文字から始まり、それがだんだんに発達して表音文字になる。漢字は原始的な文字で、ローマ字やかなは、その発達したものである」といふやうに説かれてゐました。

然し、冷静に考へてみますと、表語文字から表音文字へ発達するわけがありません。文化の低い民族が、外国の文字を最も安直な方法で用ひてゐるのが表音文字なのですから。文化が高くなればアッカードのやうに、表語文字に改造します。

日本の場合も、万葉がなといふ表音文字時代から表語的な漢字かな混り文に変化していきました。ですから変化の過程をよくよく調べれば、国語学で教へてゐることはとんでもない間違ひである、と学生時代から思って来ました。ローマ字とかかなは便宜的なもので、漢字こそが本当の文字なのだ、とこのやうに思って来たのです。これが、私が漢字教育に取組み始めたきっかけです。

■「表語文字」だけが本当の文字

「手」といふ字と「授」と「受」とは中国語では全て同じ発音をします。つまり元は一つの言葉だったのです。「手」そのものが、「受け取る」ことも「授ける」ことも意味しました。

「手にする」ことは「受け取る」ことであり、同時に手渡す、即ち「授ける」ことにもなります。ですから、中国人は、「手」という言葉(文字)で、「受け取る」「授ける」ことをも表してゐたのです。所が「手」といふ字では、目で見た場合「手」と「授」と「受」との区別が出来ません。それで「手」とは別に「受」「授」といふ字を作りました。かうすれば見た瞬間に区別が出来ます。「授」と「受」といふ字を作ることが文字における進歩なのです。

このやうに文字は、言葉の足りないところをどんどん補って発展して行きました。ですから、文字を単に発音を表すだけに用ひることは、とても発展とは言へません。「表語文字」であれば、「手」そのものなのか、「受」けることなのか「授」けることなのかが、見た瞬間に判別出来ます。まして現代のやうに情報を短時間により多く、かつ正確に受け取らうといふ場合、表音文字によって情報を受け取るのと、漢字のやうな「表語文字」で受け取るのでは、それは大変な違ひが生じます。

実は、このことはもうずっと前から確信してゐたのですが、それが近頃実証されたそうです。ソニーの井深大さんから聞いた話ですが、「アメリカのマサチューセッツ工科大学で実験したことですが、世界で使はれてゐる表記について、それぞれ読み取る速度を計った所、日本の漢字かな混り文が最も、効率がよいことが判った」といふことです。

この実験結果から、「日本語の漢字かな混り文は、情報をキャッチするのに世界で最も効率が高い表記法である」といふことが証明されたと言って可いでせう。

文章を目で読み取ることは、耳で聞くよりもはるかに効率が高いものです。ですから、ニュースを耳で聞くよりも、新聞で読むほうが速くてかつ正確です。益々情報化の進む世の中では漢字かな混り文による伝達方式が、国際競争で有利なことは明らかです。明治の発展も、敗戦後の経済復興も、いろいろな理由が考へられますが、その基本には、情報を速く、正確に捉へる、といふ利点があったことは間違ひないと思ひます。

■日本の子供のIQはなぜ高いのか

一九八二年五月、イギリスの有名な科学専門誌「ネイチャー」に、心理学者リチャード・リン博士の論文が発表され、それは世界中に大きなセンセイションを巻き起しましたが、その時、これに最も関心を示して然るべき日本が独りこれを問題にしなかった事は実に意外でした。

その論文とは、リン博士を中心とする「日・英・米・仏・西独」先進五か国の学者たちが協力して、共通の智能テストに依り、それぞれの国の子供たちの智能検査を行ったのですが、「日本を除く四か国の子供たちの平均IQが一〇〇であったのに対して、日本の子供たちの平均IQだけが一一一であった」といふ発表だったのです。

平均IQ差が一一点もあるといふ事は大変な事です。世界中がこれを問題にした

のは当然でした。中には「テストの実施に何か手落ちがあった為ではないか」といふ悪意のある批判もありましたが、多くは事実であることを素直に認めて、日本の子供たちの智能がなぜ高いのか、その原因の探究に真剣に取組みました。

その結果、欧米の学者たちの大方の意見は「漢字の学習がその原因になってゐるのではないか」といふものでした。例へば、アメリカのメイヨー・モース氏は「漢字の学習は、複雑な構成を把握する幾何学的な感覚を発達させてゐるのではないか」と推測してゐます（実はもっと大きな理由があるのですが、これは後述します）。

このやうに欧米の学者たちがその原因を探究してゐるといふのに、本家本元の日本ではジャーナリズムが採り上げて事実を報道しただけで、学者たちは何の意見も口にせず、原因の探究もしなかったのです。

■漢字学習は子供の智能を高める

欧米の学者たちが推測した通り、「漢字の学習は子供の智能を著しく向上させる働きがある」のです。この命題は、一九七三年（昭和四十八年）五月、アメリカのフィラデルフィヤで開催された第六回世界人間能力開発会議で、私が発表した時のテーマそのものであります。このことに就いては次の第三章で述べることにします。

第一章でも述べましたやうに私は、小学生の漢字学習について、その指導法の研究調査を徹底的に行ふべく、昭和二十八年、教育委員会指導主事を辞職して小学生を直接指導すること十四年、その間に先に挙げたやうな実に意外な事実を発見しました。それは「漢字を覚える能力は一年生が最も強く、学年が進むにつれて弱まって行く」といふ事でした。これは今までの常識に全く反するものでしたので、昭和四十三年

から幼稚園児に漢字学習をさせる実験を始めたのです。

繰返しますが、幼稚園児の漢字を覚える能力は、一年生よりもずっと強いことが直に判りました。然し、それよりも特筆すべき事は、それまで集中力の無かった子供たちが、何事につけても強い集中力をもつやうに変った事であります。遊びと学習の切替へも速く、何事も早く理解できて上手に出来るやうになったのです。

毎年卒業前に智能テストを実施してゐた幼稚園では、それまで一〇〇だった平均IQが漢字学習を始めた年に一一〇になり、次の年には一二〇、三年目には一三〇になる、といふ事件が起りました。それで私は「漢字には幼児の智能を高める何かがある」と考へ、その年(昭和四十六年)からその原因を探究することに努めました。

■漢字を使へばなぜ頭が良くなるのか

その結果次のやうな理由があることを発見しました。

例へば、表音文字の「目」と「見る」とは、「め」と「みる」、“eye”と“look”といふ風に何の関係もありませんが、漢字では「見」は「目」といふ字を元にして作られてゐます。ですから、「目」を覚えた子供は「見」といふ字を見ると、「『目』で何かをすることだらう」とひとりでに考へます。その考へることが頭を使ふことであり智能を高めることになるのです。

足を使へば足が強くなるやうに、頭は使へば必ず良くなるものです。使はなければ絶対に良くなりません。漢字を使って教へれば、子供たちは自然と頭を使ふやうになります。だから頭が良くなるのです。

ヨーロッパの子供たちは表音文字を使ってゐますから、教はらない文字は自分では考へやうがありません。所が漢字の場合は、教はらない文字でも「何といふ字だらうか」と考へ、考へることによって頭を良くしてゐるのです。

所が最近、台湾の子供たちは日本の子供たちよりも智能指数が更に高いことが判りました。幼児期の漢字教育が、日本よりも徹底してゐるからです。しかも、日本では「耳」が付かない「声」を使ってゐますが、台湾では「聲」ですから良いわけです。

実は、日本の子供たちにも正字の「聲」を教へてみましたところ、子供たちは「『声』よりも『聲』の方が解り易い」と口を斉へて言ひました。

ですから、今のやうな略字体は作るべきではなかったのです。読むことについて言へば正字の方が読み易いのです。画数が多く複雑な漢字の方がむしろ特徴がはっきりしますから覚え易く、かつ読み易いのです。

ですから文字改革などは、すべきではなかったのです。もともと言葉や文字は約束事ですから、変へてはいけないものです。

文字は、現在の用をなすばかりではなく、過去と現在、現在と未来とのつながりを付けるものです。今書いたものが将来も役立つものであって欲しいのです。ですから文字を変へてはいけないのです。

私はワープロの普及によって、現代人の漢字を書く能力が少々低くなってもやむを得ないと思ってゐます。

例へば、交通手段が発達した今の世の中で、足が弱くなることはどうしようもないことです。昔の人はよく歩きましたから、当然足が強かった。それが今では、歩かなくなりましたから、どんどん退化してゐます。文明の利器が発達すれば、それを利用するのは当然でせう。

ですから、ふだんの生活の中で出来るだけ手足を使ふことが望ましいやうに、ふだんワープロを使ってゐる人でも、親友には手紙を肉筆で書くやうに努めることです。肉筆で書くことは、生活の中での潤ひにもなり、また書は芸術ですから、今後はそのやうな努力も必要だと思ひます。書は、私たちが絶対に失ってはならない大事な財産だと思ひます。

■智能は幼児期に言葉に依って創られる

従来「智能は生れつきに依る」と考へられてゐましたが、近年は「幼児期に創られる」それも「言語によって創られる」といふ考へが強まって来ました。

フランスの言語心理学者ポール・ショシャールは、フランスの小学校に就学してゐる黒人の子供たちの生育歴を一人一人丹念に調査しました。そして「アフリカで生れ、そこで幼児期を過した子供たちの智能は、フランスの子供たちの智能より明らかに低いが、アフリカで生れてもフランスで幼児期を過した千供たちの平均IQは、フランスの子供たちの平均IQに劣らなかった」といふ事実を明らかにしました。

右の事実は「智能は生れつきに依らない。幼児期に創られるものである」ことを教へてくれます。また、「智能は幼児期の言語活動に依って創られる」ことを推測させてくれます。ではなぜ「智能は幼児期に言語に依って創られる」のでせうか。

人間の大脳はよくコンピューターに譬(たと)へられます。然し、似てはゐても、大変な違ひがあります。コンピューターは初めからハードウェアの容量が決ってゐて、それに見合ったソフトウェアしか入力できません。いくら立派なソフトウェアを作っても入力できないのです。

これに対して人間の大脳は、人力されたソフトウェアに依ってハードウェアはいくらでも容量が大きくなるやうに準備されてゐるのです。つまり、ソフトウェアが立派になればそれに従ってハードウェアも大きくなるのです。そして大きくなったハードウェアが更に立派なソフトウェアを入力し易くする、といふやうに相互に影響を与へ合ひながら発達して行くのです。

所で、人間の大脳は二十歳頃までにハードウェアの発達を終へますが、幼児期の発達が特に目覚しく、この時期に成人の大脳の六〇から七〇パーセントまで発達し、小学校に入学する六歳頃には八〇パーセントまで発達するさうです。既に述べましたやうに大脳のハードウェアとソフトウェアとは相互に影響し合って発達して行くものですから、幼児期の大脳の使ひ方で決ったハードウェアの容量の大小に依ってその後の発達が左右されるのです。大脳のソフトウェアは言葉が基幹ですから、「幼児期に吸収する言葉の質と量に依って智能が決定する」のは当然だと言へませう。

■言葉よりも働きの大きい漢字

人類の歴史は百万年とも二百万年とも言はれます。仮に百万年としますと、初めの九十九万五千年が「言葉だけを使ふ人間の歴史」であり、残りの五千年が「文字をも使ふ人間の歴史」であります。人類は言葉を使ふことに依って万物の霊長になりましたが、その進歩は九十九万五千年の長きを以てしても実に僅かで、その歩みは遅々たるものでした。

所が文字を使ひ始めますと俄かに目覚しい進歩が始まり、この五千年は文字通り日進月歩の歴史でした。その違ひの生ずる原因は「言葉と文字との働きの差」に在りま

す。“視覚言語”である文字の働きは、“聴覚言語”の言葉に比べて、比較にならない程大きいからです。

「幼児が漢字を学習すると智能が高くなる」といふのも、基本的には漢字が典型的な視覚言語であることに因ります。同じ文字とは言へ“かな”やローマ字のやうな“表音文字”は視覚言語とは言ひ難いほど不完全な文字ですから、いくら学習しても漢字のやうな効果は得られません。

それは、先の話の続きになりますが、“目”と“見る”といふ字で比較してみただけでよく判るでせう。“見る”といふ字は「目の人における働き」を表したものですから、“人”を表した“儿”と“目”とを組合せて作られてゐます。だから、“儿”が解れば勿論ですが、それが解らなくても“目”に関係がある事だけは解ります。

これを“め”と“みる”また“eye”と“see”との関係と比べてみると好いと思ひます。全く関係がありません。だから、初めて見る綴りは解らないのが当り前で、いくら考へても解るわけがありません。ですから、初めて見る綴りに対して“思考”が起らないのです。だから、頭の働きが良くならないのです。

■初めて見る字を推理する

生れつき脚の弱い人でも脚を使へば強くなるやうに、生れつき頭の働きの悪い人でも頭を使ふことに努めれば必ず良くなります。だから、幼児期の幼児には頭を使ふやうに仕向けることが必要なのです。

所が、漢字を学習した幼児は、初めて見る漢字でも「何といふ字だらう」と自然に考へるやうになるものです。“目”を学習した子は“見”を見て考へずにはゐないのです。

また、“鳩”“鶴”を知ってゐる子は、学習しない“鷹”や“鷲”といふ字を見ますと、「鳥の仲間だな。何といふ鳥だらう」と考へずにゐません。この事が幼児の頭の働きを良くするのです。

私が大東文化大学附属幼稚園長を務めてゐた時の事です。ある教師が黒板に“悪魔”といふ字を書き、読める子を求めましたが誰も読めませんでした。それで教へようとしましたら、子供たちが「待って。考へるから」と言ったのです。「読めない字をいくら考へたって解るわけが無い」と教師は思ったさうですが、子供に言はれた通り待つことにしたさうです。すると、子供たちは相談を始めました。「下の字には“鬼”といふ字がある」「さうだ。だから鬼の仲間に違ひない」「上の字は昨日の新聞にあった“凶悪犯人”のどれかだと思ふよ」「ぢやあ、キョウか、アクか、ハンか、ニンだ」「解った。アクマだ」「さうだ・アクマだ」といふやり取りがあって、「先生。その字はアクマでせう」と言ってその教師を驚かしたのです。

■頭は働きたがってゐる

体は、使へば発達するやうに作られてゐます。その体を幼児はいつも使ひたがってゐます。だから、うまい具合に体が発達して行くのです。然し、いくら体を動かすことが好きな幼児でも、腹が空っぽだと体を動かしたがらなくなります。全くの空腹が続いたら元気の出ようがありません。腹に栄養のある食べ物を入れて満たしてやる必要があるでせう。

頭も、使へば発達するやうに作られてゐます。その頭を、幼児はやはり使ひたがってゐるはずです。だから、漢字を覚えると、知らない漢字を見ても頭を使って読まう

とするのです。所が、これまで幼児の漢字教育は早過ぎると言って幼児の頭に漢字を入れてやることをしませんでした。それで幼児は頭を使ひたくても使ひやうが無く、従って頭の働きが良くならなかったのです。頭の栄養になる漢字を頭の中に満たしてやる必要があるのです。

幼児の大脳は、単に「漢字を理解し記憶する」といふ働きをするだけではありません。消化器管の働きのやうに、無意識の中で漢字を分類し整理して、その中に潜んでゐる法則を捜し出し、その法則を使って未知の漢字を推理するもののやうに思はれます。この大脳の働きは幼児期に最も強く働いて、年と共に衰へて行くらしく思はれます。だから、幼児期に漢字を学ばせる必要があるわけです。

■論理的・体系的に創られた漢字

漢字の最も古いものは、具体物を表す為の“象形”と、抽象事を表す為の“指事”といふ造字法に依る二百そこそこの文字です。これらは皆単体の文字で、当時は“文字”と呼ばれず、“文”と呼ばれてゐました。

今使はれてゐる漢字は“象形”“指示”を除きますと“会意”“形声”に属する複合文字です。これが“字”であり、先の“文”と合せて“文字”といふ言葉になりました。この構成法が実に論理的であり、見事な体系を形成してゐて、その為初めて見る文字でも、その意味から発音まで推理できるものが少からずあるわけです。次にその例をいくつか挙げてみませう。

且・租・粗・祖・組・阻
青・清・晴・請・精・静
喬・橋・驕・嬌・矯・僑
圣・経・径・軽・茎・脛
用・踊・俑・涌・通・痛
召・招・沼・詔・昭・紹
方・彷・芳・坊・防・紡
包・抱・泡・胞・砲・飽
辰・晨・震・振・販・娠
尚・掌・賞・常・裳・償
肖・消・硝・梢・宵・逍
奇・崎・埼・綺・寄・椅
化・花・貨・囮・靴・訛
白・伯・帛・粕・拍・舶
半・伴・畔・袢・拌・判
交・校・効・絞・郊・狡
令・鈴・玲・伶・冷・零

“且”は地上に同じ形の物が積み重った象形ですが、「積み重ねる」「上に加へる」といふ意味を表した文字ですから“指事”です。“租”は「積み重ねた稲」といふことで、租税用の稲を表した字です“粗”は「積み重ねてある米」で、直に食べる“精米”に対して“玄米”を表した字です。“祖”は、祖父、曽祖父、高祖父等「先祖代々の神」を表した字で

す。ネは神を表す部首です。“組”は「糸を何本も重ねて編んだ糸(組紐)」を表した字です。また「紐を組む」意味を表します。“阻”は「積み重なった崖」を表した字です。阝は崖の象形です。

■漢字は生後十か月から覚えられる

我が国では、明治以来「漢字は難しい」といふ理由で先づ“かな”を学習させ、これを習得させた後に漢字の学習に移ることにしてゐます。既に述べた通りです。然し実際は、概念を有った漢字は幼児が関心を示しますが、表音文字のかなには関心を示しません。記憶の原理は“関心”と“反復”の二つに尽きますが、関心の無い文字の学習はいくら反復しても記憶になりません。「心ここに在らざれば視れども見えず」だからです。

十年前からいくつかの保育園で実験してもらってゐることですが、生後十か月の子供でも、漢字カードを見せるとこれに関心を示し、じっと凝視し続けるさうです。そこで、目を指して“め”と言ひ、“目”といふカードを見せて“め”と言ひます。

かういふ事を毎日繰返してやってゐますと、「目・耳・鼻・手・足……」などの漢字が識別できるやうになります。“目”といふカードを示すと自分の目を指さし、“鼻”といふカードを示すと自分の鼻を指さすのです。勿論「め」とか「はな」とはまだ言へません。然し、漢字の有つ意味は理解してそれぞれが弁別できるのです。だから、「漢字は言葉よりも覚え易い」といふ事が出来ます。

幼児は皆漢字カードが好きで、泣いて愚図(ぐず)ってゐる時でも、漢字カードを見せますと泣き止み、読んでやりますと御機嫌になるといふことです。だから、漢字を覚える

のです。それは努力して覚えるのではありません。ひとりでに覚えられてしまふのです。